

## 西洋弁論・修辞学概史（Ⅳ）

奥山 藤志美

### 18世紀のイギリスの弁論・修辞学

18世紀に目を移すと、そこには学校教育のカリキュラムにおいて西欧伝来の古典・古代の弁論・修辞学の最後の花が開いたという光景を目にする。18世紀の前半は少なくともフランスの批評家、特にボワロー-Boileau, ラパン Rapin そしてル・ボス Le Bossu の影響が前世紀の前半よりも顕著であった。この古典弁論・修辞学の諸規範に対する過度の賛美は嘆かわしいくらいで、この規範を絶対的なもの、犯すべからざる規則として無批判的に受け入れている。

アリストテレスやホラチウスの規範に疑問を加えるという傾向がロンギノス Longinus の著作を翻訳した本が版を重ねることから起こる。ロンギノスの『崇高について』*On the Sublime* が漸次人気を呼ぶようになるにつれて、文章の善し悪しの判断の基準は規範の問題と言うより趣味の問題に移っていった。この新しい思潮はレオナード・ウエルステッド Leonard Welsted の『英語の熟達と詩歌のあり方に関する論考』*Dissertation Concerning the Perfection of the English Tongue and the State of Poetry*(1724), ロバート・ローズ Robert Lowth の『ヘブライの宗教詩について』*De Sacra Poesie Hebraeorum*, そしてエドワード・ヤング Edward Young の『独創的作文についての考察』*Conjectures on Original Composition*(1759)等に現れている。以前よりも自由で主観的な発想がだんだん賛同者を募らせていくにつれて、舞台は所謂ロマン派的作家の登場を待つようになる。

この批評界における思潮の変化はこの時代の弁論・修辞学の本にも反映されている。18世紀の弁論・修辞学者は依然として古典の規範に義理立てをしていたが、しかし同時に自分の教え子を余り束縛せず彼ら自身の時代にふさわしい、自然な文体を編み出す所謂「時代の熱意のダイナミックな力」the dynamic force of enthusiasm を受け入れることを奨励した。彼らは煩雑な弁論・修辞学の詩姿を分類したり、定義したり、例証する必要を感じなくなったのだ。学校教育の現場ではそれ以前長らく等閑視されてきた弁論・修辞学の一部門の〈話し方〉delivery の部分がシェリダン Sheridan やウオーカー Walker のような達人達の演説方法のプログラムが広まるにつれて再び注目を浴びるようになる。教会の説教壇での説教は中世以来連綿として練られてきて来ていたが、テロットソン Tillotson, バーロー-Barrow, アッタビュリー-Atterbury 更にはもっと有名だったボスエ Bossuet, ブルダロー-Bourdaloue そしてマシロン Massillon のようなフランス人の

華麗な説教の影響は無視できないだろう。18世紀の終わり頃になると説教集のようなものが今日の小説類と等しく店頭で販売されていた。

18世紀の教師達は大抵弁論・修辞学をかってアリストテレスが考えたように理論的な学問と言うより、実用的な術ととらえていたと言ってもあながち彼らの名誉を傷つけることにはならないだろう。17世紀においてと同様に詩学と弁論・修辞学に一線を描くことは易しいことではなかった。批評家や弁論・修辞学者は例証として自国の純文学から引用している。ジョージ・セントズベリ George Saintbury は「事実、弁論・修辞学は新しく雄弁術 Eloquence と幾分軽蔑の念を含んで呼ばれているが、文学の術となった。換言すると批評となった」と言っている。この詩学と弁論・修辞学の融合はこの世紀が弁論・修辞学を学問的に真面目に取り上げた最後の偉大な世紀であったと言うことを説明する理由となるだろう。

少なくとも50編の弁論・修辞学のテキストがこの世紀間に書かれたと言うことは重要なことだろう。しかしこのうち6か7つのテキストに注目するにとどめようと思う。16世紀や17世紀にはイギリスの弁論・修辞学に関する学術的論文が沢山公にされているが、18世紀の弁論・修辞学を概観したものは一冊も今までのところ世に現れていない。相当網羅した概観、しかしこれも18世紀の後半を扱っているものだが、残念ながら未公刊ではあるが博士論文は一編ある。著者はハロルド・ハーディング Harold F. Harding という人で題目は「イギリスの弁論・修辞論、1750-1800」、と題し1937年にコーネル大学に提出している。ただこの時代の個々人の弁論・修辞学者を取り上げた本やモノグラフ、学位論文等はあると言うことは付け加えておこう。

ジョン・スターリング John Stirling の当時大変人気を博した弁論・修辞学の本『弁論・修辞学のシステム』 *A System of Rhetoric*(1733)は30ページの小冊子だが、この本には最初の部分に97の詞姿 figure and tropes の一覧表を載せている。この冊子でギリシャ語やラテン語の弁論・修辞学の専門用語が英語に翻訳されていて、これに対して簡単な定義をし、例文も添えている。この本の第二部は『弁論・修辞の術』 *Ars Rhetorica* は第一部のラテン語の翻訳に過ぎない。(これは恐らく当時のグラマー・スクールの校長達が現場では母国語の弁論・修辞学のテキストを使うことに躊躇を感じたことへの妥協の産物であったろうと推測される。)

97をも詞姿のリストと例題を乗せているこの本は18世紀の他の本よりも沢山の詞姿を扱っているという長所を持っていた。何故なら当時の弁論・修辞学者はだんだん例題を絞っていった傾向にあったからだ。この本に匹敵するのは83の詞姿を扱ったジョン・ホーム John Holme の『修辞論』 *The Art of Rhetoric*(1739)ぐらいなものだろう。

『雄弁術講座』 *Lectures Concerning Oratory* はジョン・ローソン John Lawson(1712-59)によって1757年に公刊されている。彼はダブリンのトリニティーカレッジ出身の修士

号を持った男で、この大学の最初の大学図書館の司書を務めた人であった。彼の本はアリストテレスの『修辞学』に範を取ったものでキケロやクインテリアンのものから主に例題を取っている。最初の6講は古典と当時の修辞学の概史に当てられ、第7講は「模倣に関する諸考察」“some thoughts concerning Imitation”を展開し、残りの講義を理性との関わりにおいての雄弁（8講から9講）を、諸感覚との関係においての雄弁（12から18講）を順に論じている。彼は文体 style を「装飾、構成、詞姿」Ornament, Composition, Figure ととらえて雄弁と諸感覚との関係で扱っているのは7つの講義である。

彼はなかなかのセンスのある、時には独創性をも備えた学者で、現在や未来のメリットも視野に入れ過去に蓄積されてきた情報を吸収している。アリストテレスを踏襲していることからわかるとおり、当時18世紀に風靡していた批評と修辞学を合体したロンギノスの方向とは一線を画していた。彼が提唱した簡潔で、やたらに難しい専門用語を排した散文はジョナサン・スウィフトの『若い牧師にあてた一書簡』 *A Letter to a Young Clergyman* (1720) の文体感と近いものがある。

ジョン・ウオード John Ward という男はロンドンのグレシャム・カレッジ Gresham College の修辞学の教授として1720から彼の死に至るまで奉職した。彼の死の翌年に二巻からなる彼の修辞学の講義集が世に出る。題して『雄弁論』 *A System of Oratory* と言うが、ハロルド・ハーディング Harold Harding は18世紀の修辞学を概観してこのウオードの本を「英語で書かれたギリシャ・ローマの修辞学の理論を集大成したもの」“the most elaborate and detailed synthesis of Greek and Roman rhetorical theory published in English”と賞賛している。この本は概ね「クインテリアンに依っているが、彼は最初の部分でアリストテレスやキケロ、クインテリアン、ロンギノスやその他の著名な人たちの指針を踏襲しているし、古典の最良の部分からの例題をも取っている」と明言している。54の講義が863ページに収められているが、この分量は網羅性を表しているが、学校現場では採用されなかったことがうなずける。この本はしかしながら18世紀で発刊されたものの中でヒュー・ブレア Hugh Blair の『修辞学講義』 *Lectures on Rhetoric* にほぼ匹敵する網羅性を持っている。

ウオードがこだわったのは主に文体である。彼の講義の半分はエロキュシオン *elocutio* を問題にしている。修辞学の他の分野は分量的には適切ではあるが、網羅的とは言えない。8講はデスポジション *disposition* を扱い、6講はインベンション *invention*, デリバリー *delivery* の部分は4講にとどまり、メモリー *memory* の部分はたった1講に過ぎない。残りの8講はイミテーション *imitation* と諸感情の本質、演説者の性格そして修辞学の簡単な歴史を扱っている。この講義集を概観すると修辞学がいかに18世紀の中頃までは依然として徹底的に仕込まれていたが見えてくる。

次に18世紀において修辞学の〈発話〉 *pronuntiatio or delivery* の部分に注意を向け

た二人の人物を取り上げてみよう。この方面で最も活躍したのがあの劇作家リチャード・ブリンズリー・シェリダン Richard Brinsley Sheridan の父トーマス・シェリダン Thomas Sheridan であろう。彼の仕事は3つに分類できる。1) 読み方と話し方、2) 発話、3) 教育である。

彼の最も人口に膾炙した、そして恐らく彼の代表的な作品は『演説法に関する講義集』*Lectures on Elocution* (1762)であろう。この本は彼の実際の講演の中から7編を編集したものであるが、これは専ら実際の演説の仕方、つまり間の置き方、発音の仕方、アクセント、強調の仕方、トーン、ピッチ、それにヴォイス・コントロールと身振りと言ったものを扱っている。更に彼の『読書に関する講義集』*Lectures on Reading* (1775)は散文や韻文の読み方の指南にあてられている。大僧正のホエトリアー Archbishop Whately は19世紀に発刊された修辞学のテキストでシェリダンの文節を区切って朗唱する方法を推奨している。シェリダンが役者として成功した秘訣の一つはこの修辞学の演じ方の部門 delivery を重視した点だったろうと思う。彼は18世紀の末の修辞学が<文体> style から<演じ方> delivery に推移していった時勢の立役者であり、学校現場でこの演説のコンテスト（弁論大会のようなもの）が流行した時代の推進役を果たしたと言えよう。

もう一人の18世紀の<演じ方> art of delivery の推進役をしたのがシェリダンと同様アイルランド出身の俳優ジョン・ウオーカー John Walker (1732-1807)であった。1769年に彼は俳優業を辞め、しばらくの間ケンジントンのグラベルーピッツ校 Kensington Gavel-Pits School で教鞭を執った。それから独立して塾みたいなものを開き、それから30年かなりの成功を取めた。

彼の公刊されたものの最初は『演説を改良するための演習帳』*The Exercises for Improvement in Eloquence* (1769)である。この本はそれまでの斯界の著名人の諸作からの抜粋で公衆の面前でものを朗唱したり、演説する術を身につけたい人たちの要求に応えたものであった。ウオーカーの仕事の中で最良で、最も人気を博したのは『演説の諸要素』*Elements of Elocution* (1781)であろう。この二巻本は<修辞的句点法> rhetorical punctuation, <発声法> voice inflections, <身振り> gesture, <アクセントの置き方> accent, <強調の仕方> emphasis, <発音法> pronunciation を扱っている。この本はご覧のようにシェリダンの『演説に関する講義』*Lectures on Elocution* と似ていることは明白である。

所謂<演じ方> delivery の研究に特別執心したのはプロの俳優を業としたのは人たちがであったのは驚くに当たらない。何故なら歴史上の、ものに憑かれたような雄弁家（デモステネス、チャーチル、ウエリアム・ジェニング・ブライアン William Jennings Bryan, ビショップ・シェーン Bishop Sheen, ビリー・グラハム Billy Graham 等）はある意味では偉大な俳優であったのだ。ウオーカーは実演の力量は文句なしであったが、シェリダンが持

っていた古典の学識を持っていなかったので理論を補強する実例を引用しようとする  
と馬脚を現した。

18世紀の後半のイギリスの修辞学の歴史は三名のスコットランド出身の修辞学者  
の独壇場と言っても過言では無い。イングランドと合併した後、スコットランドは一種  
の文化的ルネッサンスが起こり、エジンバラは「北のアテネ」と呼ばれるようになった。  
この間、哲学の分野であれ、美学の分野であり、心理学の分野であれ、歴史学の分野であ  
れ、経済学の分野であれ、イングランド系の人よりスコットランド系の人物が排出する。  
修辞学の分野においてもケームズ Kames, キャンベル Campbell やブレア Blair のような  
一流の学者が輩出した。

スコットランドの司法家で心理学者であるケイムズ郷、ヘンリー・ホーム Henry Home,  
Lord Kames(1696-1782)は三巻からなる『批評の諸要素』*Elements of Criticism* を1762  
年に発刊する。この本はその後しばしば版を重ねその後の詩歌や修辞学の理論に際だ  
った影響を与えている。この本で扱われている範囲は本論の枠を越えている。ケームズ  
の本は事実美学に貢献すること大である。この点でこの本は他の三人のスコットランド人  
の業績（フランシス・ハッチンソン Francis Hutcheson の『美と徳に関する我々の理念の  
原点』*Original of Our Ideas of Beauty and Virtue* (1725), ダビッド・ヒーム David Hume の『審  
美眼の基準に関して』*Of the Standard of Taste* (1725), アレグザンダー・ジラード Alexander  
Gerard の『審美眼に関する試論』*Essay on Taste*(1758)と軌を一にする。ケームズの本のご  
く一部だけが伝統的な意味での修辞学を問題しているに過ぎない。彼の目的は「人間の  
本性の感覚的な部分を検証すること、本能的に嫌いなもの、並びに本能的に好きなもの  
を追求することで、もし出来ればこの手段によって芸術作品の真の原理を解明すること  
」であった。彼の願望は人間の心理を解明することによって全ての芸術作品の善し悪  
しを判断する普遍の基準を見つけることであったのだ。

ケームズ郷の本は文学に対して否定出来ないほどの影響を与えたにもかかわらず、教  
育現場では広く用いられることが無かった。それは彼の本は量が多く、いろんなものを  
含み過ぎており、更にその文体が仰々しかったからだ。彼の影響は間接的に影響を受け  
た人たちを通してなされたと言っている。ケームズの批評理論を主な研究対象としたヘ  
レン・ランドル Helen Radall は「もしブレアの直接的影響をケームズの間接的影響と見な  
すなら、およそ百年にわたるこの修辞学に関する文献類はその主な概略並びに規則の多  
くはケームズの『批評の諸要素』に負うことが大であると言っても過言でない」といっ  
ていることは傾聴に値するだろう。

次にスコットランド出身の著名な修辞学者はジョージ・キャンベル George  
Campbell(1709-96)である。ジョージ・センツベリーとほぼ同格の批評家はキャンベル  
の『修辞学の哲学』*The Philosophy of Rhetoric* (1776)を「18世紀の生んだ新しい修辞学

の最も重要な本」と評している。キャンベルのものはケームズ郷の本よりも読みやすいし、スコットランド三人組の一人のブレアのものより内容に深みがあると言っている。

キャンベルの修辞学に対する特別の貢献とは何か？一つは彼は修辞学は説得と言うより、目的を持ちうると言う考え方を敢えて提起した点だろう。彼の論文の最初のパラグラフの中で彼は eloquence(彼は rhetoric という語よりこれを好んだ)を言説が一つの目的に適用する術又は才能と定義した。更に付け加えて演説には次の四つの目的のいづれかがあると述べている。即ち 1) 理解を高めること 2) 想像力を刺激すること 3) 感情を動かすこと 4) 意志力を高めることがそれである。これはキケロの修辞学の三機能を想起させる。即ち 1) 教えること(docere) 2)説得すること(movere) 3)喜ばすこと(delectare)である。アリストテレス並びに彼の追随者の考え方つまり修辞学は弁証法から生まれたものと言う考え方を逆転させて、キャンベルは論理学は修辞学の道具に過ぎないと主張している。キャンベルが英語に関わるものにとって特に有名なのは演説が反論されうるか、国益に関わるか、それと現在に関わるかと言う基準を良き用法の道しるべとしたことだろう。

キャンベルの修辞学の「哲学」を探求するその姿勢は当時としては破天荒で、且つ独創的だったので、彼の本はその初版が出てから何年にもわたって修辞学の徒を魅了し続けた。この本は18世紀や19世でも20版以上もの需要があり、1870年までアメリカの大学でごく普通に採用されていた。彼のこの本はもしその後のヒュー・ブレア Hugh Blair の『修辞学と文学についての講義集』 *Lectures on Rhetoric and Belles-Lettres* と言うこれまでに最も行き渡り版を重ねた驚くべき本が出現していなかったら、更に広く行き渡っただろうと思う。

ブレアがこの本を出版した1783年までに彼はエジンバラ大学で24年にわたって講義の経験があったのだ。1759年、先のケームズ郷の後押しもあって、採算抜き出で修辞学に関する件の講義を一般大衆に向かって行うことに同意した。この講義は熱狂的に迎えられ、友人達は時の国王ジョージ三世にエジンバラ大学に修辞学の特別教授職を付与するよう進言し、彼を初代の教授に任命するよう要請するほどだった。エジンバラの聖ジャイルズ教会の説教者の名声は当時すでに高かったので、国王も1762年ブレアを初代の王任命の修辞学の教授に任命することに何ら躊躇することは無かった。彼もこれに応じて彼の講義集を出版することに取りかかった。この当時すでに手書きの講義のコピーが熱心な学生の間に行き渡っていたし、それが大胆にも著者の許可無くして店頭で販売されてもいたのである。

ブレアの講義録が再版を重ね何部ぐらい出たのかは正確な数字は不明だろう。しかし、1835年の段階で少なくとも50版は出ている。しかもこの本は後になるとフランス語、イタリー語、ロシア語にまで翻訳されているし、19世紀の末に至るまでイギリスや

アメリカの学校で使用されつづきけられてきた。アメリカの思想史家の一人であるウエリヤム・チャルヴァト William Charvat はブレアの講義集は一時英語圏の教育界の半数がテキストとして使用していたと明言している。

何故ブレアのテキストがこんなにも人気があったのか？その理由の一つは彼の本は一卷本の中に57の講義を満載するという包括性を持っていたと言うことだろう。まず、所謂文学に関する13回に及ぶ講義に加えて、〈趣味〉taste, 〈美〉beauty, 〈崇高性〉sublimity と言う当時の人気のあるキーワードを論じている。又その上に言語学と英語の文法に関する新旧の概説をも行っている。それから主要な詩姿 major of figure of speech の用法を視野に入れた〈文体〉style の諸法則を詳説したこと、特に散文の作法に力点を置いて；雄弁術の歴史を概観したこと；様々な場面でのスピーチを指南したこと；詩歌を論じたこと等があげられる。もう一つあげるなら、この講義集のいかにもカリスマ性を感じさせるトーンが当時の教育の指導的立場にある人たちに受けたのではなかろうか。ブレアが雄弁家は有徳の人でなければならないと執拗に主張したことは、彼の論のバックボーンになっていた。それからこの講義集のプレゼンテーションのやり方も人気の秘密であった。明確に、しかも組織的に構成されてきた他に、この講義集は初心者にもわかるように、彼の使うキーワードを定義し、それから具体例を持って説明し、必要と思うならば理解を助けるために歴史的、時代的背景をも付け加えた。その結果彼の本は学校のカリキュラムのあらゆるレベルで使用可能であったのだ。

イギリスの修辞学の歴史は18世紀をもって終焉をむかえたといっているいかも知れない。しかし、通常この歴史を一步繰り下げてリチャード・ホットリーRichard Whately の『修辞学の諸要素』*Elements of Rhetoric (1828)*を含めるのを常としている。彼は1820年代のオリオール・コレッジ Oriel College を中心とした輝かしいオックスフォードの改革者のメンバーの一人であった。最後に彼はダブリンの大司教に任命されるのだが、1826年ジョン・ヘンリー・ニューマン John Henry Newman の助けを借りて『論理学の諸要素』*Elements of Logic* を公刊する。この本は彼がそれより以前に『メトロポリタニア百科事典』*Encyclopaedia Metropolitana* に寄稿した項目を敷衍発展させたものである。

ホイットリーの修辞学はどちらかというとアリストテレス的色彩が濃厚である。まずアリストテレスの「修辞学は論理学から枝分かれしたものである」というテーゼから出発し、修辞学を「論理的作文」argumentative composition として扱う。彼の本は四つの項目の基に構成されている。即ち 1)、理性や悟性に訴えること（この部分はアリストテレスの論証の部分に相当する）2)、意志に対する訴え（この部分はアリストテレスの倫理的・情緒的訴え）3)、文体 4)、発話である。この修辞学の本の特徴はアリストテレス風のサインとか、例とか蓋然性 probability と言う概念を詳説した点だろうし、それに加えて論理的誤謬の鮮やかな分析と、推論の機能の展開 development of the function of

presumption と議論における論証の重さを指摘した点だろう。

19世紀の最初の25年ぐらいは、前世紀のキャンベル、ブレア、ホットリーの三羽カラスが修辞学を教えられていたアメリカやイギリスの学校現場では最も多く使われていた。三人の中ではブレアが最も人気があったようだが、識見のある人たちの間ではキャンベルとホットリーの評価が高かった。この兩人とも特に独創性を持っていたわけでは無いが、彼らは修辞学を論理学と心理学のしっかりした諸法則に基礎をおいていた点が目立つのである。もし彼らのテキストがもう少し前に出ていたら、学校教育現場における修辞学の地位ももう少し長持ちしただろうという想像はなりたつだろう。

また20世紀にはいって「新しい修辞学」なるものについてちらほら話題に上ってくる。この「新修辞学」なるものの追い風を受けたのは最近の心理学や意味論、諸行動科学が注目を浴びつつあることと無関係ではない。この「新修辞学」と関係してよく引き合いに出されたのは I.A. Richards I.A. リチャーズとケネス・バーバーグ Kenneth Burke である。リチャーズの修辞学に対する関心の趨きは1923年に書いた C.K. Ogden C. K. オグデンとの共著『意味の意味』*The Meaning of Meaning* という意味論にある。彼は1936年『修辞学の哲学』*The Philosophy of Rhetoric* を公にする。この本の目的の一つは古典古代の人々が教えた修辞学の説得法の限界を強調することにあつた。彼の主張はこうである。言語の説得的な様相だけに関心を限定することは言語の他のいろいろな用途から自らを切り離すことである。かつてホイットリ主教が彼の『批評の諸要素』(1828)の中で彼は自分の研究を専ら「議論的作文」argumentative composition に限定しようと言ったことをとらえて彼の古い修辞学への矛先を向けたのである。これに対してジョージ・キャンベルの『修辞学の哲学』は聴衆の心理に対する目配り、又修辞学の機能を広げ理解力を啓蒙し、想像力を喜ばせ感情を動かし、更に意志力に影響をあたえた点で二十世紀の修辞学の一つのより好ましいモデルとリチャーズには思われたのだろう。リチャーズの主張を予約すると次のようになろう。彼は主に言語がいかなる言説においても聴衆の理解や又ある場合は誤解を生むはたらきをするのだという。この彼の関心のありどころを見るには彼の言語研究で用いた四つのキーワード：即ち sense, feeling, tone, intention である。

## 結 び

修辞学の古典の血脈はホイットリーと共に終焉を迎える。ブレア、キャンベルそしてホイットリーの修辞学のテキストは19世紀においても依然としてイギリスやアメリ



力の学校現場で用いられていたところもあったが、古典の修辞学の伝統は衰退の道をたどらざるを得ない状況にあった。アレクザンダー・ベーン Alexander Bain の『英作文と修辞学』 *English Composition and Rhetoric (1879)*、ジョン・F・ゲナング John F. Genung の『修辞学の実用的要素』 *Practical Elements of Rhetoric (1902)* やフランシス・P・ドネリー Francis P. Donnelly が作成した1920年代の後半のハイスクールやカレッジ用のテキスト類は幾分古典の修辞学の匂いをとどめていた。しかし、これらのテキストが出版された頃には伝統的な修辞学に対する評価は下降線をたどる運命にあった。教育現場における修辞学の課程は新しい方向を模索するようになる。つまり、〈導入部〉exposition, 〈論理的展開部〉argumentation, 〈細部の記述部〉description, 〈叙述部〉narration の四部門を前面に出すことがそれである。このような傾向の表れの利点は〈統一性〉unity, 〈首尾一貫性〉coherence、それに〈強調点の置き方〉emphasis に注目したことである。〈文体〉style の部分は依然として注意を引き続けていた。しかし、興味の焦点は修辞的詞姿 schemes and tropes から適切な用語法へと推移していった(この傾向が徐々に神経質的な“正しい用法”correct usage にこだわるという、このまからざる方向をとる)。それから〈統語法〉syntax に関心が高まる。(これは通俗的な手引き書の影響のもとに「正しい文法」という、どちらかと言えばネガティブなものになっていく。それからパラグラフの研究が起こりトピック・センテンスやトピック・センテンスを上手に展開して〈統一性〉unity, 〈首尾一貫性〉coherence, 〈強調の置き方〉emphasis を最大限に獲得する方向に向かう。上述の作文のコースのこの新しい理論的根拠は修辞学をおとしめるよりはむしろ現代の学校教育において修辞学のコースがこの概論の中で扱われてきた人たちのテキスト類による訓練から如何に距離を置くかに向けられてきたのが実情である。

現代において古典修辞学に新たな光を当て、この伝統を復活させたのがコーネル大学のスピーチ学部であった。アレグザンダー・ドラモンド Alexander Drumond とエヴェレット・ハントの両氏はコーネル大学でセミナーを立ち上げ、ここでアリストテレスの『修辞学』 *Rhetoric*、キケロの『雄弁について』 *De Oratore*、クインテリアンの『雄弁術教授法』 *Institutio Oratore* を読んだ。この古典修辞学を再評価するプログラムがこのコーネルのこのスピーチ学部の卒業者が全米のいろいろな大学にポストを得たときにインパクトを及ぼす契機になる。30年代や40年代では古典修辞学に関する論文発表の場は英語並びに英文学の機関誌ではなく『スピーチに関する旬刊誌』 *Quarterly Journal of Speech* や *Speech Monographs* であった。英語英文学の教師達がこの方面に注意を払うようになったのは T.W.Baldwin の『ウエリアム・シェークスピアのわずかなラテン語の知識並びにそれにもましてギリシャ語の少ない知識』 *William Shakespeare's Small Latine and Lesse Greeke* とかドナルド・L・クラーク Donald L.Clark の『セント・ポール校時代のジョン・ミルトン』 *John Milton at St.Paul's School* ならびにカール・ウォーレス Karl Wallace の『フ

ランシス・ベーコンのコミュニケーションと修辞学についての考え方』 *Bacon on Communication and Rhetoric* のような英文学の大家達が如何に修辞学の訓練を受けたかを解明する研究が現れたからなのである。この古典修辞学への新たな興味に弾みをつけたのがモーテマー・アドラー Mortimer Adler の『本の読み方』 *How to Read a Book* が爆発的に売れたことと、所謂一世を風靡した「新批評」 *New Criticism* が戦後のアメリカの大学で広く受け入れられたことと無関係では無い。アドラーも「新批評」の人たちもテキストを読み解くプロセスに修辞学の技法を適用したのだ。

ケネス・パーク Kenneth Burke は I.A. リチャーズ I.A. Richards より古典修辞学者に対してより尊敬の念を持っていた。しかしリチャーズと同様に修辞学の範囲を拡大する可能性を信じていた。1951年一般教育誌 *Journal of General Education* の中の論文の中で（この論文は彼の代表的著書『動機の修辞学』の出版の一年後に出される）「もし古い修辞学と新しい修辞学（この修辞学は‘新しい科学がもたらした新しい洞察力によって新たな生命力を付与された）の違いを一言で言うならそのキーワードは古い方は‘説得’ *‘persuasion’* で、その強調点は、入念な計画・企画 *deliberate design* だと言えよう。これに対して新しい修辞学のキーワードは‘同一化’ *‘identification’* と言えようか、ただし、この中には聴衆に訴える力の‘無意識’の要素が含まれている」と説明している。‘アピール’ *‘appeal’* と言う概念はパークのコミュニケーション理論の真髄である。人が他の人間と協力すべく誘う場合に記号を使う場合は人は聴衆と一体化しなければならない。パーク特有の語を使えば *consubstantial*（合体化）しなければならないのだ。パークにとって修辞学とは同一化を獲得する様々なモードの研究に過ぎない。彼にとっていかなる種類の構造 *structure* も同一化の様式である。我々が言説を組み立てる *structure* か配列する *arrange* やり方は、例えば我々の言説を我々の聴衆のニーズに合うように調整する方法の一つである。文体 *style* も又同一化の様式である可能性がある。何故なら文体も我々の言語を聴衆のレベルに合わせる意識的又は無意識的な試みだからだ。パークの”*dramatistic pentad*” : *name, agency(means), scene( background), purpose* は人間の行為の動機を分析する彼の批評的装置を構成しているのだ。

パークの刺激的ではあるが時々理解困難な＜新修辞学＞ *new rhetoric* をこれ以上探求する余地は残されていないし、現代の広告業者が説得の修辞の技法に基づいたきわめて洗練されたテクニックを分析する余地も無い。現代の広告代理店に従事している人たちこそ現代においてアリストテレスが教えた修辞学の最も成功した実践者であろう。クインテリアンなら彼らの商売の倫理性に苦言を呈したかも知れないが、しかし彼とても現代の広告業者が消費者の購買行動に影響を与えるに見事な仕事をやり、かくしてその国の経済の活性化に寄与していることは否定できないだろう。彼らの縁続きとも言うべき一般企業並び公共機関の渉外係は彼らの所属している諸組織の公共的な良好なイメー

ジを醸成するのに貴重な教訓を広告マンから得ているのである。この簡単な概説は網羅的でも無く、時間的余裕もないので読者を様々な名前や本や論文の題目や年代の数字を並べて少々混乱させた気味があることは著者も認識しているつもりだ。要は細かな細部を想起するよりも、一般的な古典古代の修辞学の伝統が脈々と続いてきたことを理解して貰えば幸甚である。古典古代の修辞学が現代では休眠の状態にあるが、この学問それ自体は過去においても現代においても瀕死の状態であったためしはない。かつてこんなにも常用だったものが、こと人文科学に関する限り時の経過と共に全く不合理になることも、無効になることもないのだから。

## あとがき

これまでの5回に分けて連載した概論の執筆動機についてちょっと触れておきたい。筆者が秋田大学を定年退職した一年前に、教育学部から教育文化学部への改組があり、それまで所属していた英語科が欧米文化課程と国際コミュニケーション課程に分かれ、筆者は国際コミュニケーション課程に所属することになった。さて、この新しい課程の原論に当たるものが何だろうかをしばらく考えた。本来ならこれを議論して、カリキュラムを検討して、しかるのちに課程を決めるとするのが本筋だが、どうもそれをやった覚えもない。初めに学部改変ありき、あとは見切り発車の感があったことをおもいだす。ところで自分の中では〈コミュニケーション〉と銘打つには何かそれにふさわしい核になるものがあるのではないかと模索していたことも確かで、それが西欧の修辞学と弁論術だと気が付き、書棚をひっくり返して、1960代から70年代にかけての学生時代に読んだ本に出会った。それをまとめて講義をしてやろうと思っていたが、時間切れで定年を迎えた。今度はたっぷり時間が取れるので読み返してみて、改めてこの伝統がすごいものだと感じ入った次第である。ごく大雑把な言い方で恐縮だが、われわれの東の文明圏では、すごい修辞に凝った文章を書く人や、名演説家はたくさんいるが、それを意識的に方法化するという伝統がなかったのではないか思われて仕方がない。それとも筆者が浅学なものでそれを知らないだけかもしれない。世をあげて、〈コミュニケーション〉とか〈情報の発信〉とかが叫ばれているが、その背後にどれだけ方法論があるのかを問うてみるのも無駄ではなかろうと考えて、抽中にあった講義の下敷きを開陳したまでである。さらにかなり膨大な参考文献があるが、紙数の関係で次号に譲りたいと思う。